

深慮の畏友恒川武敏先生

在りし日の恒川貴兄の追憶をしたためるにより、貴兄への、ささやかな、供養といたします。

河 合 孝 雅

(百万遍知恩寺執事長)

恒川貴兄と、私は佛教大学の前身佛教専門学校時代の同期の桜でありまして、私は一組に在席し、恒川君は二組に在席する秀才で、学友の信頼を一身にうけて活躍して居られました。その昔、今の佛教大学の校舎へ毎日お互いに通学していたことを、思い出すともう四十五年になり、昭和十一年に第二十三回生として卒業しました。

前田聰瑞先生、小西存祐先生、恵谷隆戒先生、三枝樹正道先生、秦隆真先生等思い出深い恩師の御指導を頂いて今日を迎えている訳であります。

先程も申しましたように、恒川貴兄は、頭がよく、勉強家でした。秀才組の一人であって佛専を終えるとすぐに大正大学の仏教学科へ進まれました。私は京都に残って平安養育院

に入り、秦隆真先生のご指導をうけたので、しばらくは音信を断って居りました。東京勉学中の恒川貴兄は椎尾弁匡大僧正のお寺清林寺で隨身という形で大僧正の薫陶をうけ、昭和十四年の三月に、大正大学を優秀な成績で卒業されたのであります。

その頃は大東亜戦争最中のことでしたので恒川貴兄は召されて名古屋の小隊へ入隊、幹部候補生となり、予備士官学校へも入学、その後外地へ転戦したのですが、幸いにも昭和二十年七月内地勤務として無事帰還されました。戦友としては沖繩で活躍の山本有綱師があります。

二人はその昔を偲んでは友情を温めて居られたようであります。

恒川貴兄が終戦後勤務された、総本山知恩院時代、京都市役所時代、更らには佛教大学時代と、どの職場においても誠に、仕事の計画が大変緻密であり、理路整然として心服させられたのは、椎尾弁匡先生の薫陶と、戦時中のきびしい軍律からくる経験とに負うところがまことに大であったのではないだろうかと思います。

昭和二十一年恒川貴兄は総本山知恩院の教務部へ勤務されました。その時浄土宗管長は望月信亨大僧正、執事長は三枝樹貫道僧正で小西存祐先生が教務部長でした。小西先生のもとに私と恒川貴兄、そして同期の古賀義光兄、もう一人、岡本智教さんの四人が知恩院の布教、伝道、教化等の仕事について種々計画、総本山の教化活動をおし進めて居りました。小西先生はご存知の通り、佛教大学の学長となられた学者でありましたので、毎日部長室にとじこもってむづかしい書物をひらいて勉強しておられました。私たちは戦後の総本山の布教等の実施方策について相寄り計画を進めたのでありますが、この計画については常に恒川貴兄によってその原案が立てられました。戦後思想的にも経済的にも大変困難な時期であったにも拘らず、その計画はまことに緻密であり、深く考

えてからの立案で、みんなを心服させました。

戦争のすんだ翌年でした。知恩院では先づ戦死戦没の英霊の追悼法要とご遺族の慰問をするため浄土宗管長のご親教を実施することになり、知恩院門跡の望月信亨大僧正のご出座をお願いすることになりました。先程も申しましたとおり、時の管長は大正大学の学長をされた文学博士の望月信亨大僧正で八十才を越え、ご高齢でありました。戦後の交通事情は大変悪く、九州、中国地方への管長さんのご親教は大変な苦しさを伴いました。

列車の数が少かったこともあり、汽車は大勢の人で、一パイで混乱を極めました。大きな行李をかついでの旅で、時には、ご老体の管長さんをおついで汽車の窓からお入り願ったこともあり、ました。

大変海が荒れて大しけの日でしたが、信者さんが待つておられるというので、九州の天草島へ、小さな船で渡ったことなど思い出深いことです。

やらねばならない事、計画したことはぜったいにやりとげる。そしてまた若い人の指導には相当に厳しく、さすが軍隊仕込みだなと感心したことです。知恩院では十二月の始めか

ら三週間に亘って、お坊さんになるための修行をいたします。これは浄土宗の教えを伝宗伝戒して一人前の坊さんとなるための修行でありまして加行といわれます。この加行の指導主任を恒川貴兄は受けもってくれました。

修行僧は佛教大学、大正大学などに在学中の人が多くて元氣一パイの加行僧を震え上らせたのであります。

当時指導を受けられた加行僧たちは今や浄土宗の中堅人物として活躍しておられ厳しかった恒川君のことを懐しい恋しい思い出として語っているのを私は時々聞きます。

恒川貴兄の知恩院在職は短く、昭和二十三年三月に、お山を下りて京都市役所へ転職、民生局へお入りになりました。

これは先輩の大橋俊有先生（現京都文教短期大学長）が京都市民生局長をされていたこともあって、知恩院から恒川貴兄の手腕を見抜き、引っこ抜かれたようでした。京都市では民生局の保護課の指導係長とか、あるいは保護課長を歴任された。その後北区の民生安定所、今の福祉事務所の所長を、つづいて左京区の福祉事務所長をされました。同じ頃総本山知恩院の独立ということもあって私も、知恩院のお山を下りて、大本山百万遍知恩寺の方へ移り、百万遍保育園の運営に関係す

ることになりました。そのため保育事業を通して恒川貴兄とおつき合いは更らに深くなりました。何か私と恒川貴兄との結びつきに、切っても切れない因縁があったように思われます。

恒川貴兄が左京区の福祉事務所長に転勤されたときは、私の百万遍保育園が左京区にあった関係上、お会いする機会も多くなり、お互いに大いに語り合ったものであります。貴兄は保育行政には特に力を入れて指導して下さいました。その指導はきびしい中にも非常に親切でありました。

思いやりの心がふかく特に保育行政には力を入れられ、地域の保育園長との交流のみならず、保母さんとの交流も福祉の一環として常に心にとめられ、保母一人一人にも親しく語りかけられ、家族のことなども聞いてやるというやさしい面がありました。私の保育園の現保母長の浜田さんは、その当時の恒川貴兄のことについて次のように話してくれました。

立派な先生が福祉事務所長さんになられましたネ。恒川先生は河合先生と同期だそうですね。こないだも園長会で、わたくしに「あなたは僕の初恋の人にそっくりだ。昔を思い出すワ。お子さんの正美さんは元気にしとるか」と。「このよ

うに恒川貴兄は思ったことをズバット言う人でもあり、まことに親切でしたから保母さんたちからは人一倍慕われ尊敬されていました。

その福祉事務所長を定年少し前にして市役所をお辞めになり、恵谷先生に懇請されてこんどは佛教大学の講師として、社会福祉学科で学生の指導に当られることになりました。その年の九月には浄土宗務庁に招かれ、確か、教化部長の要職をされ、浄土宗の教学方面の仕事を担当されました。特に恒川貴兄は寺門経営のためには是非とも寺庭の奥様方の必要性を力説されました。

「お寺というところは和尚はいそがしい。壇家さんが少いと、和尚は役所づとめか、学校の先生などをして寺の維持経営をたすけねばならぬ。檀家さんが多いと住職は檀家まいるにとび廻らねばならぬ。その留守をまもるのは寺庭婦人の奥様方である。寺庭夫人の結集を計り、研修会をひらいていただく。」

このような考えから恒川貴兄は寺庭婦人会の創設に取り組みました。大阪の一心寺へ行き、前田志津女史（故前田聰瑞先生の御令室）の御協力を得、鎌倉大仏さんの佐藤治子女史

に会長をお願いして、いよいよ浄土宗寺庭婦人会は発会し、今の隆盛を見るに至って居るのであります。

その後恒川貴兄は佛教大学の社会福祉学科で子弟の指導に専念されましたが、その講師時代に知恩院の鵜飼隆玄執事長からの要請もあって、総本山知恩院の布教師会の仕事を手伝っていたことになります。その時は奈良の上野馨雄師が布教師会の会長で、私は副会長としておたすけして居りました。布教師会では恒川貴兄を迎えて幹事長の要職をお願いし、総本山の布教、伝道についての計画を推進していただくことになりました。

「お念仏の心を筆の手で」のモットーを掲げて、法然上人ご遺訓の一枚起請文百万巻写経運動を展開したのは恒川貴兄の幹事長のときであります。岸信宏ご門主を発願主と仰ぎ、鵜飼執事長、上野会長が陣頭指揮をとり、岩井信道師、恒川貴兄と私などがこの写経にとりくみ、源光院を写経道場として一枚起請文の写経を始めたところ、百人からのひとが参会され、みんなに大変よろこんでいただきました。その後土方了峻師、当麻信隆師のお援けをうけて、この写経は既に百三十五回をかぞえることとなり、今は毎月二十三日、二百人を

こえる善男善女の参加のもとに盛大に行われて居ります。道場も源光院の道場では狭くなり、和順会館の三階の大広間へ移りましたが、この写経の計画をおしすゝめたのは恒川貴兄でありました。奥さんのみち子さんは第一回から無欠席で檀家さんの奥さん四、五人とご一諸にこの道場へ参会して、写経を喜び、心の安らぎを頂いておられます。

恒川貴兄はまた非常に厳しかった反面、思いやりのふかい心をもった方でした。京都市役所を辞めたのち、一時平安養育院の院長をされたことがあります。私が平安養育院を訪ねると、子供たちに、やさしく、ジュンジュンときとされているところを度々見かけました。不幸な子供たちの育成には一見識をもっておられたようです。平安養育院の北本先生は平安養育院時代の恒川先生について次のように話して下さいました。

「恒川先生は本当に温厚なやさしい先生でした。子供たちには大変やさしく、ニコニコと笑いながら、分り易くさとされました。子供の心に訴えるようにおはなしをされました。その姿が今も眼の中に浮んでまいります。

また佛教大学の学生さんがよく先生を訪ねて来ました。た

しか卒業論文のことでご指導を願っているようで、先生は学生さんにもとても親切にやさしくご指導しておられました。」

恒川貴兄の奥さんも平安養育院時代の主人を偲んで「平安養育院を自分の家のように考えていました。たくさんの子供ができたといふ、心から不幸な子供さんの幸せを願って家の子供達がやきもちをやく程でした。」と話してくださいました。

恒川貴兄は知恩院、浄土宗務庁、京都市役所、平安養育院、佛教大学と重要な役職におられて、席の温まる暇もなかったことですが、自坊称念寺での教化についても決して忘れることなく、毎月一回檀徒の方々を集めて、お念仏をすゝめる集いを開かれました。そして昭和四十四年四月には西院老人憩いの家を開設、自坊を老人の心の安らぎの場として提供されました。

「拝む心は安らぎをいたぐく。身体が丈夫になる。長生きができる。法然上人は選択本願念仏集にお説きになったように、仏さまを拝み、口に南無阿弥陀仏を称えと、延年転寿、福寿無量のよろこびをいたぐくことができる。」

と申され、毎年彼岸会、お盆には念仏の別時会を修行され、

その時には併せて戦死戦没の物故者の施餓鬼をおつとめになりました。毎月の例会は勿論のこと、この時は憩の家のお年寄りもたくさんお詣りになり、念仏のこえが一堂一パイにひびいたことであります。

恒川貴兄と同期の友達には名古屋の清正学園長の三枝樹亮成師、京都では元華頂高校教頭の大橋誠宏師、元鳥津労務部長森博純師、京都教区教化団長桑生教隆師、大本山百万遍知恩寺執事坪内義則師、和歌山教区長の坂口竜道師、元兵庫教区長谷口正博師、広島教区会議長の田部元清師など特に親しくおつき合ひしておりましたが、みんなあの元気な恒川貴兄の急逝にはおどろいたことでしょう。恒川貴兄は友だち思いの人で、人の世話をよくする学兄でありました。ヒョー／＼としてこたわらない人でした。昭和四十九年六月のことです。私が大本山百万遍知恩寺の執事長に就任したときなど、私の寺へとんで来てくれまして、心から喜んでくれるとともに「本山の教化運動にはこれから応援するよ」と激励してくれました。親友の坪内義則師を百万遍本山の執事に推薦していただき、今なお坪内兄のお援けをうけており、おかげで本山は百万遍念仏昂揚、利剣名号百万人運動と教化活動を活発

に展開、堂宇の内観外観ともに面目一新することができましたが、これ偏えに恒川貴兄の外護があったことと信じています。

恒川貴兄はまことに私の心の友であり、深慮の畏友でありました。その恒川武敏学兄が昭和五十六年四月二十二日、佛教大学研究室で突如として急逝されたのであります。この日は百万遍本山では法然上人の御忌大法要の御逮夜法要をおつとめしておりました。本山への電話で恒川貴兄の急逝のお知らせをうけたときは、本当にびっくりしました。「エエッ」と声をつまらせました。心臓がとまるとよく云われますが、この時は私の心臓に大きなショックを与えました。電話で貴兄の急逝を聞いたあと、私の心臓は結滞し始めました。不思議なことに、この結滞がとまりません。すぐにもご自坊の称念寺へとんで行きたいのですが、ご本山の法要のことなどがあって、その日は夜になって、坪内義則師とやっとお寺へまいました。ご霊前にぬかずき、ご回願申したようなわけがあります。心の友を失うということは大変なことだと知りました。

心臓にまで大きなショックを与えるということを知りまし

た。二十二日の夜は佛教大学の花田先生はじめ沢山の先生が何かとお手伝いをしておられました。喪主の恒川良昭さんからご葬儀についてのご相談をうけ、花田先生、家政幼稚園長の堀省之先生に葬儀委員をおねがいし、四月二十三日ご親族の通夜、四月二十四日檀信徒一般の通夜、四月二十五日本葬儀告別式を執り行うことになりました。

四月二十四日の通夜の導師は嵯峨釈迦堂清涼寺の貫主鶴飼光順上人によって執りおこなわれました。恒川貴兄は尾張に生れ、幼少にして嵯峨釈迦堂の清涼寺に入山、先々代の恒川現靈上人のもとで得度し、その弟子となりました。清涼寺は恒川貴兄の幼少の頃の修養の場であり、佛専時代もここから通っていました。そんなわけで後に恒川貴兄は自坊称念寺の墓地と清涼寺の恒川家の墓地とに分骨されて納骨されたのであります。

四月二十五日は佛教大学長水谷幸正先生御導師となって葬儀告別式が執行されました。四月二十五日という日は法然上人御忌の正当の日でありまして、総本山知恩院をはじめ大山百万遍、大本山黒谷、大本山清浄華院の四総大本山では法然上人御忌大法要がとめられる聖日であります。不思議に

もこのよき聖日に恒川貴兄の本葬儀が行われることは、お念仏を喜び、たくさんの人にお念仏をすゝめた恒川貴兄には法然上人のお導きを特におうけになったことと、この不思議な因縁をみんなで語り合ったことであります。

その日は佛教大学、称念寺、憩の家のみなさんは勿論のこと、教界学界の諸先生、友人など貴兄の遺徳を偲んで沢山に参詣され、焼香され最後のお別れをおしんで、ご冥福を祈りました。

中陰中の三七日の速夜には特に同期の友によっておつとめすることになり、遠近からたくさん友だちが称念寺へはせ参じました。京都の大橋誠宏、桑生教隆各師と私、滋賀の吉水哲応、久野真雄、古賀義光各師、奈良の坪内義則師、大阪の小上裕哉師、和歌山の坂口竜道師、遠く広島から田部元清師など廿余名の同窓が集って、ご回願申し上げ、そのあと、恒川貴兄の思い出話に花を咲かせ、昔を偲んだことであります。

昭和五十六年六月三十日には私たち同窓は北海道の札幌に集って旧交を温めることになっていました。網走の篠崎英仁兄の招きで、札幌グランドホテルに集った同窓二十余名は御名号を床の間にまつり、ありし日の恒川貴兄の面影を偲んで

ご回顧、ご冥福を祈りました。

「恒川貴兄は思いやりの深い男やったナ。ヒョーヒョーとして物ごとにとだわらないところがあつた。友だち思いで、試験のときは、ノートをまとめて、よく見せてくれたヨ」

「あれはたしか昭和五十一年のこと、長い間会わなかった僕たちが、佛専卒業後四十年ぶりに和順会館に集つて同窓会を開いたが、その時は発起人となつて何かと世話をしてくれたのに、惜しい友を失つて了つたネ。こんども彼は北海道へ行くと言つておつたのに、残念なことだ。」

など思い出ばなしに花が咲き、恒川貴兄のご冥福を祈つたことであります。

自坊での恒川貴兄はまことによきお爺さんでありました。貴兄のお宅を訪ねますと、貴兄は孫たちを膝の上にだいて、ニコニコやさしくお話をしている姿をよく見たものです。亡くなる少し前のことでした。それは四月十九日ということ。恒川貴兄は奥さんをはじめ家中の人に

「長い間ご苦労さんやったナ。今まで大学や役所や本山のことなどでいそがしくとび廻つていて、何もみんなにすることができず、すまなかつたと思つてゐる。今後佛教大学の方

は部長、主任をやめることにして、他の先生に私の代りをお願いした。これからは少し暇もできるので、みんなどこかへ出かけようや。」

という言葉があつて、そのあとすぐに、

「そうや、今日みんなで何か食べに行こう。」

と家の人をうながし、奥さんも息子さんもお嬢さんも、お孫さんもみんな揃つて、ご馳走をたべに行かれたということを知りました。この日は恒川貴兄はいつものニコニコ顔を一層ほころばせ、好々爺さんぶりを發揮して、家庭サーブに つとめたことでしょう。

平素から恒川貴兄は度々私を自分の車にのせて百万遍まで送つてくれましたが、亡くなる前日、乾泰正先生を新しい車に乗せてお宅まで送つてくれたそうで、その時、乾先生に、「こんどの新車、とても乗心地がよいワ。この新車で、一諸に旅行に出かけようやナ。僕は家内を連れて行くから、君も奥さんをつれて来いヨ」

「それは有難いな。是非ともお願い致します。楽しいですな。」

こんな風に二人は約束されたということですが、遂にこの

約束は果すことができず、四月二十二日、お浄土へと旅立ち、
歸らぬ人となつてしまいました。本当に惜しい人を失つてしま
いました。

恒川貴兄はこの世に生をうけて、仏さまから与えられた自
分のなすべきことはみんな仕遂げてしまい、最後はお家の方
方への家庭奉仕もして、みんなに惜しまれてこの世を去って
行かれたように思います。その最後は佛敎大学の自分の研究
室で学問のために殉職するという立派な往生でありました。

苦しむことも少くて私たちにこのように死ぬのだよと教えて
くれたようでした。ご家族の方、殊に奥さんには看病するこ
ともなく、何となく淋しいことで、悔は残ることでしょうが、
立派な往生に心をなぐさめられたことと思います。

私も心の友恒川貴兄と永遠に別れることになり、相談する
友を失い、まことに淋しいことであります。恒川貴兄よ、極
楽へ往生したあとは再びこの世に還つて、佛敎大学を、称念
寺を、貴兄のご家族を、そして有縁のわたくしたちを護って
くれるよう、心から祈つてやみません。

もうすぐ、お正月です。百人一首の中に

「ながらえば、なをこのごろやしのばれん

うしとみしよぞ いまはこいしき」
という歌があります。

恒川貴兄の長いようで短かった齡六十七才の生涯、恐ら
く晩年の恒川貴兄は、昔のこと、学生時代、軍隊時代、知恩
院時代、市役所時代、佛敎大学時代を通じて、苦しかったこ
とも、楽しかったことも、みんな、家庭の安らぎの中で、恋
しい思い出として、心にとゞめられ、この世を去られたこと
と思います。

恒川貴兄との不思議な出会いの中で、恒川貴兄の死は、私
を大きな悲しみの中にとざされましたが、この悲しい思い出
が、いつまでも心の中に恋しい思い出として、きっと私をさ
ゝえてくれるものと思ひ念じて筆をおきます。

合 掌